

## 第9回小諸市学校教育審議会 議事概要

令和元年11月25日（月）開催

開催日時 令和元年11月25日（月）18時30分から

開催場所 小諸市役所 第1会議室

出席委員 出席委員 井出 忠臣、内堀 繁利、西村 廣一、岡部 弘美、  
望月 伸一、畑田 治、福田 秀永、矢嶋 真、  
鹿取 俊彦、小林 千種、白鳥 卓也 以上11名  
(欠席者 相原 良男)

## 1 開 会（進行：学校教育課長）

### 2 井出会長挨拶

井出会長 皆さんこんばんは。今日は日中日差しが温かかったですが、夕方には急に寒くなっていました。この急な温度変化に体が順応しきれていないなと感じています。気が付けばもうすぐ12月ですね。今年は台風19号の爪痕が残る年末になりそうです。そんな中、先日テレビで長野市穂保地区にある桜づつみについてのエピソードが紹介されていました。NHKでも報道されていたのでご覧になった方もいるかと思います。今高校二年生の生徒たちが小学校6年生の時に過去の洪水の話地域の高齢者に取材し、劇や歌にして残したというものです。この経験が生きて、家族に洪水からの避難をいち早く促す結果になったということです。またお互いの安否を知らせあうことに繋がり、さらに復興に向けて自分たちか何ができるのかを考えるきっかけにもなったということです。

エピソードとしてはこれだけのことですが、このエピソードの中から私たちは何を見つけることができるのかということが大切です。これからの学校を考えるときのヒントになるのではないかと感じています。注目すべき1つ目は、小学生の時に学んだことが高校生の中に今も生きているということです。災害に対して子どもたちが使命感を持ったことの表れだと思います。これは前回の審議会の議論の中で岡部委員がおっしゃった、未来を自分たちがつくっていくのだという気持ちですとか、相原委員から出していただいた地域でのきまりや基本を理解し、行動していくことの大切さがありましたが、場面を変えれば私たちが議論しているこれからの教育のあり方には、こういった面もあるのかなと思いました。特に相原委員の言葉を借りるのならば、例えば大雨が降った時にはすぐに避難するといった地域の決まりですとか、桜づつみを大切にするという基本の裏側にある地域の歴史や人々の思いにふれた学びが、子どもたちの行動に繋がったと思います。

また、一昨日の信濃毎日新聞の社説に防災教育の役割の記事が掲載されました。台風19号被害の被災地の復旧と復興にむけて若者たちができることを考えようと長野市で活動する高校生グループのフォープレイスの呼びかけに応じた50人が今月17日に集まったと紹介されています。彼らのような子どもたちを育てる教育をしていかななくてはならないなと思いながら記事を読みました。

さて、今日は中間報告案を用意しました。それから小中一貫制度の検討をしたいと思います。今日は論点を絞りません。様々な視点からご意見を願います。よろしくお願いします。

## 3 協議事項（配布資料の確認後進行が会長に移る）

### （1）審議の中間まとめの検討について

井出会長 はじめに中間報告に向けたまとめについて検討を行った後、小中一貫制度について皆様のご意見を伺うといった流れで審議会を進めていきたいと思えます。委員の皆さんには、事前に中間報告に向けてまとめた資料に目を通していただきました。前回の審議会では色んな項目を羅列しただけのものでしたが、

今回は各項目がストーリーとして繋がるようにしています。どんどん皆さんにご意見を出していただき、中身を付け加えたり、消したり、あるいは形を変えたりと柔軟に考えていきたいと思えます。簡単に資料全体の流れを説明します。

これまで審議してきた内容は最初のページの「二 審議のまとめ」の部分以降に記載しました。前回高等学校入試改革についてお話しがありましたので、児童生徒を取り巻く社会と教育の変化きちんと捉えた方がいいかと思ひ、3点にまとめて記載しています。特に3点目の求められる資質や能力についての項目の最後に高校入試制度で説明された内容の骨子を入れています。続いて、小諸市の児童生徒の状況と学校教育改善の取り組みについて、教育委員会から聞き取った内容を載せましたがここは前回から変更はありません。市の現状をうけて、これからの時代を生きる児童生徒が育つ「より望ましい学校の姿」についての洗い出すことが諮問されていることの1つであると記載しました。

より望ましい学校の姿を大きく3点にまとめています。学力については高等学校入試改革にも関連してきましたので、4行目以降に前回皆さんからいただいた意見の骨子と合わせて盛り込んでいます。その後続く不登校や特別支援教育に関して変更はありません。前回内堀副会長から育成というよりも児童生徒の視点から述べてはどうかと意見をいただきましたので、児童生徒一人ひとりの資質・能力の育ちに目を向けた教育への転換を図っていく学校が望ましいとしました。さらに、より望ましい学校の姿と小学校再編の視点という項目を設けました。ここでの育てたい能力に非認知的能力と言語能力を据えています。これまでの審議会の中で、非認知能力の育成についての意見が多く出されていたかと思ひます。出された意見を元に、中学校での実践や不登校の児童生徒への支援についての例を挙げながらどういった能力を育てたいのか少し説明を加えています。また思考力・判断力・表現力の基礎となる言語能力を育てる点についてですが、報告のあった小学校の実践や今回高校入試改革でも重視されつつあることを記載しました。この2つの能力を育てていくために、学校がどのようなことに取り組んでいくかが大事になってきます。全員が共通理解を持って横断的、連続的、系統的につなぐ一貫性のあるカリキュラムをつくり、マネジメントを実施していかなければ成果として表れてこないと議論の中で出されていました。また、現在も学校でICT機器を活用することで一人ひとりに応じた学びになりつつあると指導主事から報告がありました。今後は学校の体制として機器の活用に取り組むことが大事になってくるかと思ひますので、こちらでも記載してあります。続いて、合理的配慮やユニバーサルデザインに基づく学習と学校の環境整備について小諸市の取り組み状況を指導主事に報告してもらいましたが、今後益々大切にしていけるべき点の1つとして挙げています。また発達段階を踏まえた幼保小、小中、中高の接続についてですが、不登校の児童生徒たちが感じている学びのギャップや学校生活のギャップの解消を中核として入れました。さらに、高校入試改革の説明を受けて、皆さんから中学校以前から子どもたちが自分らしく学べる学校を選択できる力を段階的に身につけられるような教育が必要だと多く意見が出されましたので、新たに記載してあります。まとめの文章が「地域社会とのかかわり含め」となっていますが、誤りですので「地域社会とのかかわりを含め」に修正してください。ここは、相原委員や岡部委員の意見をまとめて記載しています。

では、これらの取り組みを行うための体制づくりについて、どのようなものが望ましいのかを3点載せています。1つは保護者を支える相談、支援体制づくりです。こちらは小林委員はじめ保護者の代表の皆さんから出された意見とあわせて、子どもの成長に合わせて途切れることなく支援を受け続けられる体制が必要だと記載しました。続いて人手と時間を確保し、求められる取り組みを推進する体制づくりです。学校に加配された先生をフル活用しているという話もお聞きしています。今後、取り組みを実現していくためには時間と人員を集中していく必要があります。そして、前回学校の教育の方針を聞いて保護者も一緒に行っていきたくて意見をいただきましたので、保護者の方を含めた地域の方とどのような子どもの育ちを願うのか、目標や学びのあり方を共有して、協働あるいは分担して仕組む体制を整えたいという一文を付け加えています。最後に職員間、学校間で成果と課題を共有し、連携・一貫を図る学校体制づくりです。この部分は前回お渡しした案では冒頭に記載していましたが、章立てを考えた結果、記載順を変更しました。資料の説明は以上です。どの点からでもいいですのでご意見をお願いします。

矢嶋委員 自分でも脈絡なく発言してしまったかなと思うことがあったのですか、きちんとまとめていただくととてもありがたいと思います。今回用意していただいたとおりで良いかと思っています。

白鳥委員 全体的にはいいと思います。やはり、子どもを持つ親としては、幼保小の連携が重要になってくるのではないかと考えています。幼稚園と保育園とではやり方が違うので、通っていた園によって小学校入学前にはもうバラつきが出てきていると感じています。これをそのままにしては、後々学びのギャップに結びついてしまう可能性もあるのではないのでしょうか。私には保育園に通う子どもがいますが、もし幼稚園に通っていたら違う育て方になっていただろうなと思います。比較はできませんけれども、小学校の授業参観に行っても幼稚園で育った子と保育園で育った子とでは違いがあるように感じていました。幼稚園と保育園とでは管轄が違いますので統一することは難しいとは思いますが、なんとかできればいいなと一人親として思います。

井出会長 矢嶋委員は幼稚園の園長を務められた経験がおありでしたね。今の白鳥委員のお話しを受けていかがでしょうか。

矢嶋委員 保育園についてはあまり詳しくないのですが、長野県では保育園も幼稚園のように教育していくために、研修の機会を設けようとしています。保育園の方もかなり力を入れていて、まだ始まったばかりではありますが、幼稚園とのギャップが生まれないように取り組み初めています。私も幼児教育に関する検討会の委員をやらせていただいていたのですが、幼稚園では小学校で学校の先生が授業研究をするように、保育の研究をしながら、子どもたちの遊びについても研究しています。今までの保育園ではそういった活動が薄かったようですが、少しずつ保育士も研究しようという動きが出てきています。

井出会長 矢嶋委員が園長を務められていた幼稚園は、他とは方針が全く異なっていたと聞きました。幼稚園でも場所によって方針が異なってくるかと思います。前回内堀副会長のお話しにも出ていましたが、今ある幼稚園と違って、子どもたちがやりたいことをやらせる方針で運営されていらっしやいましたよね。

矢嶋委員 おおよそどの幼稚園でも目標を持って運営していますが、どちらかという両親のニーズに応じて、しつけ面だとか新たな教育を取り入れていく面が強いように思います。

井出会長 これまでのやり方を続けるのではなく、幼稚園も変わっていかなくてはならないということですね。その中でも幼保小でどのように繋がっていくかが重要になってくるということですね。前回欠席されていて掴めないところもあると思いますが、何かありましたら望月委員お願いします。

望月委員 望むものとして書き表すと今回の資料のような形になると思いますが、今までとの違いを明確にしてより具体的になると、よりよいと思います。最低限やらなくてはならないことが何なのかを示すことで、よりメリハリがついて明確になるかと思っています。

井出会長 ちなみにご自身はどこが最低ラインだとお考えですか。

望月委員 正直にお話ししますと学校個別計画ですとか、適正規模について幾つか取り扱っておりますが、再編に関わるお話しと学校建築に関わるお話をどこまで繋げるかが非常に大きな問題になっています。どこに力を入れていくのかは色々ありますので、小諸市はどの方向を目指していくのかももう少し知りたいと思います。

小林委員 白鳥委員と同じで、幼保小で繋がりを作っていくのであれば、保育園側からもそうですが、幼稚園にも視点があればと思います。上田市内の幼稚園の中には英語教育を取り入れているそうで、私の子どもは保育園に通っていたのでその園がどうやって遊びや英語教育を行っているかはわかりませんが、幼児の頃から英語に親しんで遊びながらの学んできた子もいます。そういう面で考えると幼稚園は学校や学力のことを重視していて、保育園では健康や共有を重視していた時代だったと思います。そういった意味では、学力だとかお友だちとのつきあい方にも子どもながらに差を感じた時代でもありました。

だんだん変わってきているのは分かりますが、やはり自分の子どもが小学校に入った時に学力の差を感じてしまう雰囲気も見えましたし、子ども自身も友だちとの接触のときに感じることもあったかと思います。小学校での取り組みを幼稚園保育園のどちらに通っていても一緒にスタートできるようにしていければいいなと思っています。

福田委員 幼保との繋がりは色々難しい点があると感じました。小諸市の場合幼稚園は私立ですので、園それぞれの考え方もあると思います。まとめを見て私が気に

なったのは、市内に小諸養護学校があるので、発達障がいに関連して小諸養護学校についてももう少し触れた方がいいのと、健全な自己肯定感を持つことについてです。自己肯定感を持つことはこれから何を行うにしてもモチベーションになっていくと思います。

そのためにはまず小諸を愛していなくてはいけないのではないのでしょうか。ですから、郷土愛といったことにも触れた方がいいのかなと思います。実は私の子どもが小諸を離れてから都会の色々な華やかなものを見聞きして、改めて故郷を見つめ直す機会があったようです。私にも同じ様に幾つか思うことがありましたから、私が考えて加えるならこれかなと思っております。

鹿取委員

網羅的にまとめていただいたと思います。これまでと大きく違うのは、一人ひとりの育ちをキーワードにしている、全ての子の学びの保障をしていくことがより大事になっているかと思います。そうなるはずは系統的に実施していくことが重要になってくるかと思います。その時に非認知的能力がキーになってくるのではないのでしょうか。非認知的能力は自信や意欲、思考力、判断力に言い換えられますが、9年間や12年間で育まれていくものであって、1つの学校や学年だけで頑張っても次の段階で手を抜けば駄目です。例えば小学校から毎年子どもたちが中学校に進学してきますが、その年ごとに子どもたちの様子が違います。きっと小学校の中でもこの違いは感じられるのではないのでしょうか。高学年と低学年の繋がりの中では、いつもの4年生と今年の4年生は違うと感じておられるのではないのでしょうか。それぞれの学年は先生の価値観でかなり支えられていて、この価値観がバラバラだと非認知的能力や言語能力は目に見える形で育まれてこないと思います。

今までの教育とこれからの教育の内容そのものはあまり変わらないかと思いますが、いかに小中学校で系統的、組織的に連続して実施できるかどうかには尽きるのではないかと私自身は感じています。そこに医療機関や行政、地域の方が関わってくるのだと思います。口で言うことは簡単ですが、実際に実施するにはみんなが本当にやる気になって同じ方向を向いてやらないとできないなと感じました。まとめの表し方としては図で描くと分かりやすいのではないかなと思います。

畑田委員

審議の中で出てきた、一人ひとりというキーワードと非認知能力を入れていただいて、よくまとまっていると思います。ですが、保護者の方の気持ちを考えると、新しい取り組みをしようとするのは分かるけれども、学力は大丈夫なのか、軽視されているのではないかと不安を持たれるかもしれません。そういった不安を払しょくする文言があってもいいのではないのでしょうか。それから言語能力を取り上げているので分かることですが、何を大事にしていくのかももう少しわかりやすいものがあるといいと思います。

岡部委員

さきほど鹿取委員から図のようになると分かりやすくなるのではないかとありましたが、例えば学校や保護者、地域に求められていることなどに分けてみてはどうでしょうか。学校だけに求める内容ではありませんし、市民と共に歩む学校のあり方について書かれていますから、地域の方にも担っていただく

役割があつて、一緒に実施していただかないと望ましい学校の姿に変えていくことができないこと、家庭でも行っていただかないといくら学校が頑張っても変わっていかないことが分かるようなものがあると思います。

学校だけにお任せするのではなくて、小諸市全体でそれぞれに求められている役割が分かるよりもいいと感じました。

西村委員

井出会長が本当にうまく我々の意見をまとめてくださって素晴らしいものが出来たと思います。しかし今日も会長の補足をうかがって考えていたのですが、私の中で資料の文章がすごく心地よく感じて、ずっと通り過ぎてしまつて残らないように感じました。おそらく先ほど何人かの方がおっしゃっていたように、メリハリのつけ方に原因があるように思います。従来はこうだったけれど、これからはこんなふうに変えるということが明確に示されることを聞き手は求めているのではないのでしょうか。取り組みたいことは沢山あるのですが、はっきりと示した形で示さないと分かりにくくなってしまうと思います。市の総合計画と同じ様に、ある程度重点を絞った形にしないといけないのではないかと思います。あと、地域の方に賛成していただかないといけませんから、子どもたちの教育は学校の教員だけでなく地域の方も含めてみんなでやっていくこと、先ほど郷土愛のお話もありましたが、地域との絡みをもう少しふくらませた形が必要ではないかと思います。それから、最終的にはプロである教員の先生方にお任せする部分が多いですから、先生方も感性を磨いていただくための環境を作っていくことの必要性も感じました。

井出会長

皆さんからいただいた意見を見ていきますと、メリハリをつけて現状からどのように変えていきたいのかを明確することがこれから修正していくときの課題になるということですね。

内堀副会長

まず前提として、中間報告そのものには、今回の資料のような詳細で網羅的なものが必要だろうと考えています。ただ、地域住民の皆さんに説明したりする場合には、同時に分かりやすい概要版を作成した方がいいと思います。何人かの方がご指摘されていましたが、現状をどのように変えていくのかですとか、小諸市が目指すものだとかを教育の専門家でなくても分かりやすい言葉を使いながら説明していくことが必要だと全体を通して感じました。今回教育のあり方を大きく変える方向性として、一人ひとりという言葉がキーワードとしてあがっていると井出会長にまとめていただきました。私も同感です。もう少し踏み込んで言えば、一人ひとりの子どもを大事にしたり、一人ひとりの学びを大事にしたりしていくことかと思えます。例えば障害のあるお子さんや学校に行けなくなってしまったお子さん、もしくは学校のペースでは物足りないお子さんなどをみればわかりやすいかと思えますが、小中高含めて現在の学校の欠点は、学校の決めたペースや枠組みに子どもたちが合わせなくてはならないことだと思います。大人になってから分かることですが、学びというのは1人になって自分のペースで自由にするものであつて、誰かと一緒になってやること自体は大事でも、みんなが同じペースで行うことでは一人ひとりに合った学びは成立しにくいと気が付いていながら、学校というところは残念ながらこれまで



のやり方を踏襲し続けてきてしまいました。

歴史を振り返ってみても明治時代以来、西洋に追い付け追い越せのスローガンのもとで始めた学びの形が、一時大正時代に自由主義的教育の運動が出てきて少し改善されるかと思いきや、戦火の中で軍国主義が台頭したことで、再び優秀な軍人を育てるための教育になってしまいました。敗戦後、アメリカや西洋の制度を取り入れて変わるかと思いきや、結果として、理念は変わったけれども教育そのものの形は変わりませんでした。明治以来の教室の形も変わらず、教員の個よりも全体を重視するマインドセットもほとんど変わっていないと思います。これまで、保護者の方も何かおかしいと感じながら求めるものは変わらず、大学入試も大企業が求める人材像も変わらず、全体としては効率優先で全体主義的な教育が行われてきました。多くの学校や教員も一生懸命に頑張ってはきましたが、子どもたち一人ひとり、そして一人ひとりの学びを大事にして個々に合った学校教育が行われてきたかと言われれば、結果的には必ずしもイエスとは言えない状況だったと思います。今回の教育改革はそこを変えるチャンスだと思います。なので、丁度小諸市がこのタイミングで審議会を立ち上げて、小学校の再編がメインだとしても子どもたちの学びから検討し始めようと考え議論し、狭い審議会の場だけでなく、市民対象に説明会を開きながら場合によっては教員とも対話しながら、これからの教育のあり方を変えようとしているのはとてもいいことだと思っています。

先ほどから何人かの方がおっしゃったように、ここで議論したことが紙にまとめられて、説明会の場で結構ですと言われたから、即何かが変わるわけではありません。結局、そのことを受けた市教委や学校や教員が本気で学校の改革や学びの改革に取り組まなくてはなりません。また、小諸市としてはこういう子どもを育てたい、そのためには教育をこう変えたいというメッセージを学校や市教委だけからではなく、保護者や高齢者の方を含む地域の皆さんも含めて市全体が同じ方向を向いて行動していかなくては変化が生まれまいだろうと思います。そういった意味では、審議会で議論したことが正解かどうかは必ずしも分かりませんが、今後も引き続きいろんな議論が生まれる中で必要な修正を加えながら、おおよそみなさんが納得できるというところを必死になってそれぞれの立場でやっていくことが重要なだろうと思います。

それは、先ほど言いましたように大きな枠組みとしては学校や教員がつくったペースに子どもたちが合わせたり、学校が考える子どもたちの姿に全ての子どもを合わせたりするのではなく、子どもたち一人ひとりに着眼して、持っている能力を最大限生かしていくにはどうすればいいのかとか、またはどういった援助をすればもっと伸ばすことができるのかを考える時代になってきましたし、前の議論で申したように全てをマンパワーで取り組むのではなく、テクノロジーを使ったり、MIMのような手法を使っていくことが大事だと思います。MIMは特定の子のために開発された手法ですが、全ての子にユニバーサルデザインとして使える手法に発展してきています。最終的には教育には人と人との関わることが必要だと思いますが、こういった手段や手法を取り入れていく中で具体的に何を行っていくのかをみんなで考え続けることが大事になっているように思います。

それから、私自身の経験から考えますと、学校という空間の中で友だちと話

すことは自由で楽しく感じて、先生との関係の中で自由にできたと感じている子どもたちは昔からそれほどいなかったと思います。今は、先生との関係に加え、友人との関係にも悩みが多く、全体として学校や社会の閉塞感が年々強くなっているように感じます。例えばある会社の入社式の様子を撮影した2枚の写真。同じ型の黒や濃紺といった同一色のスーツを着て同じ髪型で同じ形の靴を履いた女性たちの写真といろいろな髪型をしていろいろな形のいろいろな柄のスーツ・スカートを着た写真が並んでいて、どちらが1980年代でどちらが今年の写真でしょうかと尋ねる記事がネット上に出ていました。答えはお分かりとおり、1980年代の写真は華やかで多様性に満ち表情も明るい。ところが、今年の写真はほとんど例外なく全員がいわゆるリクルートファッションに身を包んでいます。一体何に付度しているのか分からないのですが、とにかく学校教育の中で、目立たないこと、他の人と合わせることを身に付け、それを会社でも再現することが優秀な社員なのだと思われていた子どもたちが社会に行くのでは、これほどどんどん価値観が変わっていく時代に新しい価値観や新しい社会を創っていくことはできないと思います。国際社会の中で相対的に日本の力が弱まっていくのは当たり前のことです。必ずしも全ての子どもたちが世界に羽ばたいていくことは必要ないと思いますが、どこでどう生きていくにせよ、今まで当たり前だと思っていた価値観をちょっと立ち止まって考えてこれは違うのではないかと、これまで学校や先生に言われたようにやってきたけれど本当にそれでよかったのかとか、子どもたちが自分に常に問いながら疑問や自分の意見を持つことで新しい時代にふさわしい考え方が生まれてくると思います。たとえ内心では反発しながらも、少なくとも表面的には大人が言うとおりにやっている子が優秀な子とされる時代はもう終わりにしなくてははいけないと思います。ただ喧嘩をしろとか、反発しろと言っているのではなくて、そういったところも含めて、自分の頭で考えて違うと思ったことを言えるということが大事なのではないでしょうか。そのためには学校が圧迫感や同調圧力のある空間ではなくて、人と違うことを言ってもちゃんと聞いてもらえて失敗しても笑われないという空間になっていくことが大切だと思います。むしろ、人と違うことが評価されたり、失敗しそうなことにチャレンジしたことを褒めたたえられたりする空間になれば子どもたちがもっともっと過ごしやすく育ちやすい空間になるのではないかと思います。非常に大雑把なところですがこういったところが大事な点になってくるのではないのでしょうか。全体的にはそのようなトーンで市内の幼保小中、そしておそらく高校は将来1校になるかと思えますから、そういったことも含めて、0歳から18歳までの間の学びをどうやって成立させていくかということを出し出していければと思います。ちょっと論点から離れてしまう部分まで話をしてしまったかもしれませんが、私が思ったこととしてお話ししました。

井出会長            いえいえ、とても大事なことをお話ししてくださったと思います。一人ひとりの子どもの学び大事にしたいということの中核に据えたいということですね。

内堀副会長        そうです。学校や教員からの目線ではなくて逆側の子どもたちからの目線か

ら捉えられればと思います。

井出会長

前回の審議会でも幼稚園の子どもたちはとにかく自分で何をやりたいのか決めて取り組んでいるとお話がありました。矢嶋委員が園長を務められていた幼稚園も同じ方針で運営されていました。英語教育のような特別な活動はなくても子どもたちが自主的に考えて決めることで非認知能力にあたる部分がとても育てられて、ここで培われた力はいまだに生きる力となっています。1足す1は2を教えることが教育なのではなくて、先ほど副会長がおっしゃられたように、一人ひとりの子どもにスポットを当ててどのように育ったのかを大事にしていかななくてはいけないというのは正にその通りだと思います。そういった意味でも子ども一人ひとりの学びが成立し、子どもたちが育っていくための学校と言うのをこれから本気になって考えなくてはならないのは確かです。それから、一人の先生がどんなにいい取り組みをされていても、その場で終わってしまうとお話しされていました。だからこそ継続性あるいは一貫性が不可欠です。非認知的能力の育成は学力向上にも繋がりますし、人間力の向上にもなると思います。この力は高校入試や大学入試でも求められていく学力の1つだということも明確になると説得力が出てくるかとお聞きして思いました。それと同時に、学校の先生が本気にならなくては教育のあり方は変わりませんが、学校だけではできないことが多くありますので、市民の皆さんと共通認識の下で取り組んでいくための手立てが必要です。その仕組みを考えていかななくてはならないという所をもう少し強調したいと思います。

## (2) 小中一貫教育の是非について

井出会長

前回小中一貫教育の概要を簡単に説明しました。今日補足する資料を用意しましたのでご覧ください。審議会に先立って設立された長期学校改築検討会で義務教育学校の信濃小中学校を参観した際に伺った内容や併設型の学校の代表として佐久穂小中学校の教頭先生からお聞きしたことがまとめられています。ただ、佐久穂小中学校は現在併設型の学校ですが、いつでも義務教育学校に移行できるように同じ敷地内に校舎が建設され、それぞれの校舎も繋がっていましたので、一般的な併設型一貫校とは言えないかもしれません。

信濃小中学校の場合は、1つの校舎の中に校長先生と教頭先生が一人ずつ在籍し、先生が副校長を兼任するような配置がされたり、小学校に配属された先生が教頭先生のような役割を持ったりして、9年間に渡り子どもたちの学びを見続けることができる形をとっています。これが一般的な併設型校の場合ですと、同じ市内にある別々の公立小中学校が1つの指導体系をとっています。よくブロック校だとか学園といった名称が使われることがあります。併設型では小学校と中学校が1校ずつ一貫校になる場合の他に、小学校2校と中学校1校とで構成される場合が多くあります。それぞれの学校が別敷地の校舎を使います。バラバラの校舎にいる先生方が互いに連絡を取って、繋がりを持ちながら両校を兼務するような形式です。学年の分け方は信濃小中学校の場合ですと初等部と高等部の2つですが、佐久穂小中学校の場合は基礎充実期、活用期、発展期の3つの段階になっています。ですが、使っている教科書は一般に小学校や中学校で使われているものと同じですし、学ぶ内容もどちらも学習指導要領

に基づいております。なので、学んでいる内容は信濃小中学校も佐久穂小中学校も一般の小中学校と同じですが、カリキュラムは全く異なるものを採用しています。それぞれの良さを学ぶ体制や先生方の交流担任の持ち方等に生かして小中間のギャップを無くしていこうとしています。特に信濃小中学校では様々な子どもたちにきめ細やかに対応するための体制づくりを整えている状況です。

まず、委員の皆さんには、一言で小中一貫といいますが様々な形態があるということを知っていただきたいと思います。それでは皆様のご意見を伺っておきたいと思います。いただいた意見は次回論点を整理し議論を深めていきます。

#### 岡部委員

過去に教育委員をしていた時に信濃小中学校を見学させていただき、話をお聞きしたことがあります。あまりいい表現ではないかもしれませんが、プラスの面とマイナスの面等色んなお話を伺いました。特に、中一ギャップが無くなるといういい面がある一方で、いわゆるキャラ変のタイミングといいますか、幼い自分の殻を破る機会が無いまま過ごさなくてはならないことにつらさを感じているお子さんがいるとうかがったことが強く印象に残っています。私は子どもたちは小学6年生になることで、最高学年として責任感が芽生えるなど素晴らしい成長を遂げると思います。義務教育学校には兄弟姉妹のいない子での年下の子の面倒を見ることができるといった良さもあると思いますが、例えば小学校と中学校とで分かれていれば小学校6年生の時に最高学年としての自覚を持って成長する機会がありますが、上の学年がいることでそこまでの意識が中々持てないというお話をうかがいました。また信濃小中学校の7年生から上の学年の先生方が下級生のクラスに読み聞かせに行くことで子どもたちの実態を知ることができるという相互人事交流の機会が非常に多くできるという魅力がありました。1人の校長先生が9年間の教育の先頭に立つよりも、小中それぞれの学校の校長先生がお互いに意志疎通を図って進めていく方がよりいいと感じていますので、私はどちらかといえば併設型の一貫制度に賛成です。

#### 西村委員

私は小中一貫教育に関しては知識不足なところがあり、わからないことも沢山ありますが、岡部委員がおっしゃられた子どもたちの成長の機会の確保はおそらくやり方によって違ってくるのではないかと思います。いみじくも今日は、一人ひとりの学びを大切にするにはということが話題になっていますが、それぞれの小中学校に携わる人たちがそれぞれの子どもたちの情報を共有することが一番大事な事だと思います。併設型にしるそうでないにしろ小中一貫して教育していくことはこれから絶対必要なことだと思います。あわせて高校にもその情報が伝わるような仕組みをつくることで系統的組織的な教育ができると思いますのでぜひ高校まで含めて繋がりつくれるような仕組みができればと思います。

#### 鹿取委員

今芦原中学校区でも佐久穂小中学校でいうところの活用期にあたる、小学5年生と6年生、中学1年生の繋がりを大事にしようということで、独自に坂の上小、水明小、千曲小学校の各校長先生や教頭先生方と話しながら具体的に動きはじめています。私はこの3つの学年をホップステップジャンプで例えると、

ステップの部分だと捉えていまして、接続を重視して行きたいと考えています。トピック的に授業交換をしたり、出前授業を行ったりすることは勿論ですが日常的にこの3年間でどんな力を子どもたちにつけなくてはいけないのかを考え、大事にするために動き始めているところです。少し取り組むだけで不登校傾向にある子や不適應傾向にある子を中学校に迎え入れた時の対応の仕方が全然違ってきます。実際に私が昨年出前授業をしたクラスの子は入学後すぐに私に会いに来てくれたことで、とてもスムーズに移行できました。やはり理屈ではなく実際に子どもたちのところへ出向いていくことも日常的な接続に非常に意味を与えているなどと思います。そういった意味では、系統立ててこの学年では非認知能力や言語能力の育成を重点的に取り組むといったことが出来てくれば少しずつ変わっていくだろうと思います。

井出会長            どういった形であれ、小中一貫教育を進めていく必要があるというお考えでしょうか。

鹿取委員            連携といいますか接続を大事にしていきたいと思います。言葉だけは今まで散々言われてきましたが、なかなか具体的な動きにはなっていなかったかと思いますのでそこが課題かなと思います。

畑田委員            小中一貫制度そのものが実施されてからそれほど時間が経っていませんから、今発展している最中だと思います。3年前に文部科学省が行った一貫教育に関するアンケートの中では、一貫教育に取り組むことで比較的学力が向上したと教員が回答しています。なぜ向上したのかまでは分かりませんが、おそらくプラス面だと考えていいと捉えています。逆に、文部科学省がある程度カリキュラムの変更を認めているにも関わらず、この点についてはあまり取り組めず、また小から中、中から小への教員の人事交流についても当初文部科学省では進められていく見込みを立てていきましたが、実際にはあまり上手くいっていないという結果が出ていました。いいか悪いかは少し後になってからでしか分かりませんが、審議会では、小中一貫教育制度の中で、特に進んでいないと思われるカリキュラムの部分に相当入り込んで検討しています。ただ、慣れない中で行うことですから、運営する側はとても大変になるのではないかなと思っています。一番の理想を言えば大きな1つの校舎の中で教育が繋がって行われればいいと思います。ですが、そのためには広大な敷地が必要になりますし、その他の設備にも考慮して検討する必要があるかと思っています。私は小中が同じ施設を使っている所を体験してきましたが、運営は非常に大変です。なので、校長先生は1人でもいいかもしれませんが、教頭先生は少なくとも2人は必要で、さらに小中それぞれの連絡調整役も必要になってくると思います。教員組織そのものも充実を図っていかなければ簡単には一貫教育に踏み切れないかと思っています。

小林委員            私は前段の検討会から参加していきまして、信濃小中学校にも見学に行きました。まず、中一ギャップは無いけれども、小5ギャップがあるように感じられ

るとお聞きしました。また、学校では小学5、6年生でリーダーシップをとる機会を作って自立心を育むための取り組みを対策として立ち上げたところだともお話しをうかがいました。私は同じ校舎に小学校と中学校があったとしても校長先生は1人でいいと思っています。先生同士が子どもを育てるときのやり方の違いでぶつかって成長するのもいいと思いますし、教頭先生も2人おられてもいいと思います。ですが、リーダーである校長先生は1人がいいと感じています。私は佐久穂小中学校のような形よりも信濃小中学校のような形を立ち上げて、さらに徐々に小諸市独自の取り組みをしていきたいと考えています。計画が出来たからすぐに子どもたちも変わっていくことはないと思うので、保護者や地域の方と一緒に作っていくのであれば信濃小中学校のような義務教育学校型がいいと思います。

福田委員

私は小中一貫に興味があるというよりも、もし小諸市で小中一貫制度を導入するのであれば既存の小学校の合併は当然あるとしても、中学校2校はそのまま残して、全く新しいものをやるべきだと思います。例えば、さきほど副会長がおっしゃられたような、早いペースで学びたい子どもが集まる学校でもいいですし、逆に不適應行動のある子どもが集まる学校でもいいと思いますが、小諸市全体からスクールバス等を活用して集まれるような安心安全な学校を創るですとか、仮に小中高まで一貫するのであれば音楽に特化して、児童生徒たちが小諸高校の音楽科を目指すような学校を創るぐらいの全く新しいことをやるべきだと思います。なかなか既存のものを壊すことは難しいですし、線引きも難しくなってしまうから、全く新しい感覚でやるべきだと思います。例として、信濃小中学校や佐久穂小中学校が出ていて参考になるとは思いますが、ぜひ新しい学校の形をかんがえてみてはどうでしょうか。

白鳥委員

色んなお話しを聞いていて、一番大変なのは学校の先生方なのかなと率直に感じました。教員の方達は異動があつて小諸市に入ってくる方もいれば市外に出ていかれる方もいるかと思えます。新たに小諸に入ってきた先生にも、小諸市はこういった教育を行っていきますので皆同じ方向を向いてやりましょうと伝えるのは、やりようによってはすごく大変なことではないかなと思えます。

それを含めても、上の学年と下の学年とを繋げることはとても大切なことだと思いますので、上手く進められればと思います。

望月委員

小諸市の児童生徒数の変化ですとか、クラス数のことを考えると小中一貫校ができる可能性はあるのではないかと思います。理想的なものを創ることもそうですが、他市町村を見ますとまず1校取り組んでみるところが非常に多いですので、取り組む価値はあるかと思えます。

矢嶋委員

先ほどからお話しに出ていました非認知能力の育成は、小中で一貫するとやりやすくなると思います。幼稚園や小学校低学年で育ったやる気などが、高学年や中学生になると授業内容が多くなることで教員が教えこんでしまうことで

持ちにくくなる可能性があります。これからはそうではなくて、子どもたちのやる気を伸ばしていくように、統一して方針が展開できればいいと思います。1 つ私が思っているのは、義務教育学校を実施していく場合の難しさについてです。おそらく私立の学校であれば問題ないかとおもいますが、公立学校で実施していく場合に先ほど意見が出されました人事交流についてもそうですが、義務教育学校の校長は1人でやっていくとなるとかなり負担が大きく、ハードになるだろうと感じます。そう考えますと、併設型の方が無理なくできるのかなと思いました。

内堀副会長　　今まで皆さんから出されたように、高校まで含めるかどうか別としても小学校と中学校で一貫した教育を実施していくことはとても重要なことですので、何らかの形で連携といいますか、一貫した教育が必要であろうと思います。加えて、こういった取り組みをする際には、離れた所で別々の校種でやっていくというよりは、ある程度距離の近いところで実施した方が教育効果は上がるだろうと思います。ただ現実問題として、一貫教育をしていく仕組みを考えた時には、市内の中学校2校はまだ校舎が新しいので、この校舎を壊して新たな場所に一貫校を建設することは合理的・現実的ではないと思います。将来的にはそういった方向を考えることが必要だと思いますが、現状では、まずは鹿取委員がおっしゃったような接続を進めていって、タイミングが来たら併設型なり、義務教育学校型なりの学校を創るという方向が現実的なように思います。そのためにも学校校舎という大きな器が変わるときのことを考えて、中身も変えていくための準備を今からする必要があると思います。なので、芦原中学校区で行われていることを今度は小諸東中学校区でもどんどん進めていき、小学校の校舎の建て替えのタイミングの時にどこに建てるかを検討するとともに比較的スムーズに中身の部分を実施できるような体制を今から整えていくことが現実的かと思いました。

井出会長　　短時間にありがとうございました。出していただいた意見から論点を整理して次回の審議会では焦点を絞って議論を深めていきたいと思います。

#### (4) その他

事務局　　前回もお話しさせていただきました学校見学の日程を調整させていただきたいと思います。本日お配りしましたDVDをご覧くださいことでお分かりになれることもかなりあるかと思いますが、実際に学校に足を運んでいただき日常の授業風景を見学していただくことで次回の審議会の参考にしていただければと思います。DVDには各中学校の様子が収められていますので、ぜひ坂の上小学校の方を見学していただきたいと思います。学校の方にも無理をお願いいたしまして、この日に来ていただければ見学できるという日にちを2日間設けたいと思います。12月9日と16日の午前中でご都合はいかがでしょうか。

福田委員　　見学するときは学校の事務室に声をかければいいでしょうか。

事務局　　9日は午前9時と午後2時に、16日は午前9時に事務局が学校におりますの

でお越しいただければ適宜ご案内いたします。終了時間はその場で適宜判断したいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

(一同うなずく)

事務局            それでは委員皆様には改めてメールもしくは文書でお知らせしまして見学はご参加可能な委員の方にお越しいただくような形式でお願いしたいと思えます。

第10回審議会の開催予定：12月19日（木）18：30から公開形式で実施。

## 8 閉 会

事務局            時間を超過してしまい申し訳ありません。長時間にわたり、ご審議ありがとうございました。以上をもちまして第9回小諸市学校教育審議会を終了いたします。ありがとうございました。